



見聞録 4

bootleg-books

引き続きダウンライトの取り付け作業。 マンションに住んでるんなら、玄関や廊下なんかの天井に取り付けられている丸い埋め込み式のライトがあると思うんだけど...分かる？うん。それがダウンライト。 照明器具の設置って難しそうに見えるけど、実は取り付けが一番簡単な器具に分類出来るんだ。 差し込む電線は灰色の二芯の『F線』って言うのが基本一本。あっても二本。それ以上ってほとんど無い。 器具にはプラスとマイナスの差し込み口があって、電線を間違えないように差し込むだけで出来上がり。 因に電線は皮を剥いた時に現れる白黒の線のうち白がマイナス。(3芯入りのモノでもマイナスは白) 親方さんの受け売りなんだけど、この『白はマイナス』って言うのは電気工事のイロハの『イ』みたいなものなんだって。 で、器具に有る電線の差し込み口に『W』って書いてある方を確認して、そっちにマイナス、何も書かれていない方にプラスを差し込めばオッケー。『Wはホワイト』。って考えると間違えないよって教えてもらった。 覚えることも少ないし、丸い器具だから設置の向きだけ気をつければ後は角度なんかは全然気を使わなくても大丈夫。 素人の俺一人でも十分出来る仕事だったりする。 最初の頃は慣れなくて天井を壊しちゃったり壁紙を汚しちゃったりして補修工事をお願いしに走ることも何度もあったけれど、今は随分慣れてきた。 すっかり今はダウンライトは俺専門の仕事になりつつある。 仕事自体はとっても単純で。 だからこんな俺でも一人で作業をさせてもらえる。 始めの頃は絶対に誰かか付いていてさりげなく監視されてたから、コレでも少しは成長しているのかもしれない。 親方さんもコウイチさんも、絶対に俺を急がせたり焦らせたりとかしてこない。 おかげでゆっくりだけど仕上げは満足出来るようになってきている。

『一日仕事にして良いよ』

って言うのは親方さんとコウイチさんの口癖。

これは見習いとして高野電気工事に働きに来た人だったら必ず言われる言葉。

慌てて仕事されるより、ゆっくりでも良いから確実に丁寧に仕事をこなせ、って言う意味。

どんなに忙しい時だって『一日仕事にして良いよ』って言って貰える。

現場がピンチになった時にだけお姉さんは助っ人として手伝いに来るんだって話だから、決して今の現場は余裕があるとは思えない。実際残業を頼まれることが増えてきてるし。

でも、そんな状況の中でも絶対にオレを慌てさせたりしないんだ。

...基本的にとっても出来た人達なんだと思う。

限られた時間。

決められた目標。

前の職場は必死だった。

同期の仲間がどんどん営業で実績を上げて行く中、俺は日に一件どころか週に一件の契約を結ぶのも怪しかった。

バカでかい営業成績のグラフで俺だけが取り残されてて。

上司に一人呼び出しを喰らう度、胃が焼け付くみたいに痛くなった。

部屋に通されて。説教喰らって...

『.....でもね、僕は君に期待しているんだよ』

『...分かっているね?』

...ただ項垂れて、気持ちまで小さくなって説教に耐える俺の側にいつの間にか立っている上司

。『...岡野君.....僕が教えた通りにすれば良いんだよ...』

.....。

思い出すのも...気持ちが悪い.....。

耐えられなかった。

ストレスが胃に溜まって、胃に穴が空いて入院。

ようやく治って戻った時には、俺の席なんてもうどこにも無かった。

はは…。

まだ思い出すと辛い感覚がリアルに蘇ってくるよ。

情けないよね。

「……ふう…」

昔っからなんだけどね。

自分に自身が無いのって。

でもさ…やっぱり『必要の無い人』みたいな扱って、辛い。

この仕事についてから一日中目一杯身体を動かしてるから、思い出す頻度もそんなに高くはないんだけど、たまに…ふっ…と、得体の知れない不安感に襲われたりすることがある。

百二十五パイ（注・直径が125ミリの円のこと）のダウンライトを取り付けた後、そのまま脚立の一番上に座り込んだ。

「………はあ…」

ぼんやりと取り付けられたばかりのダウンライトを眺める。

建築現場の仕事。

…前の職業とは全然違う。

体力勝負の世界。

まだ始めてから日も浅いから、自分がこの仕事に向いているかどうかも定かじゃない。

本当は、安定したい。

認められれば、自分に合うんだったら。

職種なんかはきっと何でも良いはずなんだ。

もっと。しっかり。

確信を持って仕事が出来るとあって。

実感が欲しい。

…自信が…欲しい。

親方さんもコウイチさんも谷田君も。

皆すごく良い人だ。

仕事云々って言うのも勿論あるけれど、上司として、人間としてあの人達はとても良い。

だから、出来れば...きっと...多分.....この仕事を続けたいんだ。

でも、俺は未だに現場全体の流れすら掴めていない。

ただ指示を受けてその通りにするだけ。

...前の職場の時と同じだ。

十時の休みのミーティングの時だって、俺に答えられることは仕事の進行状況と、詰め所の出
ん材の置き場程度。

お世辞にも役に立っているとはどうしても思えない。

「.....はあ.....」

あー.....。何だかどこまでも落ち込めるよ....。

コウイチさんはきっと、そんな俺の自信の無い気持ちに気付いている。

だから、先刻みたいに俺が話に入れずに落ち込んだりとかしているのを目敏く見付けられる
んだ。

『どうしたの?』

.....コウイチさんは.....すごく、優しい。

コウイチさんは前の上司みたいに弱みに付け込んだりはしない。

俺よりも二歳も年下なのに俺よりも全然、心も精神も大人なんだと思う。

...はあ...俺って、本当にただ年だけ食って生きてきちゃってるんだよな。きっと....。

見聞録 4

<http://p.booklog.jp/book/36193>

著者 : bootleg-books

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/bootleg-books/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/36193>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/36193>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.